

(二〇一〇 前)

国

語

(問題部分 1～12 ページ)

注意

- ① 解答はすべて答案用紙の指定のところに記入しなさい。
- ② 経営学部受験者は、一と二(1～10 ページ)に解答し、
三(11・12 ページ)には解答しないこと。

国語 (経営学部以外)	一五〇点
国語 (経営学部)	一二〇点

— 次
次の文章は、西郷信綱著『日本古代文学史』の序章である（一部に改変がある）。これを読んで、問一～五に答えなさい。
(配点八〇点)

著作権保護の観点から、
問題は掲載していません。

著作権保護の観点から、
問題は掲載していません。

著作権保護の観点から、
問題は掲載していません。

著作権保護の観点から、
問題は掲載していません。

著作権保護の観点から、
問題は掲載していません。

〔注〕

○『新古今集』——『新古今和歌集』に同じ。

○賀茂真淵——国学者・歌人（一六九七～一七六九）。『歌意考』、『万葉考』などの著作がある。

○斎藤茂吉——歌人・精神科医（一八八二～一九五三）。『赤光』などの歌集のほか、『柿本人麿』をはじめ評論・随筆もある。

○柿本人麿——かきものひとまろ 柿本人麻呂に同じ。万葉歌人（生没年不詳）。

○上つ代——大昔の時代。

○ゲーテ——ドイツの作家（一七四九～一八三二）。

○ホメロス——古代ギリシャの詩人（生没年不詳）。

○シラー——ドイツの作家（一七五九～一八〇五）。

問一 傍線部(ア)「その作られた時代とともに滅びず、現代人に対話をよびかけてくる潜勢力をもったもののみが古典である」とあるが、どういうことか。八〇字以内で説明しなさい。

問二 傍線部(イ)「その点、日本の古代文学史をどのように記述するかは、一つの実験的な意味をもつであろう」とあるが、それはなぜか。著者の考えを八〇字以内で説明しなさい。

問三 傍線部(ウ)「将棋盤の上で碁をうつような仕儀」とあるが、どういうことか。八〇字以内で説明しなさい。

問四 傍線部(エ)「古代文学史を個々の作品のよせ集めとしてではなく全体として理解する」とあるが、どういうことか。古典と文学史に関する著者の考え方を踏まえた上で、一六〇字以内で説明しなさい。

問五 傍線部(ア)～(エ)を漢字に改めなさい。はつきりと、くずさないで書くこと。

二 次の文章は『讃岐典侍日記』の一節である。讃岐典侍は堀河天皇（二〇七九～一一〇七）に仕え、天皇の死後はその皇子の鳥羽天皇（一一〇三～一二五六）に仕えた。次の場面には、鳥羽天皇に仕え始めた頃、故堀河天皇のことが思い出されて仕方がない作者の様子が描かれている。これを読んで、問一～五に答えなさい。（配点四〇点）

明けぬれば、いつしかと起きて、人々「めづらしき所々見ん」とあれど、具してありかば、いかが物のみ思ひいで (a) ぬべければ、ただほれて居たるに、御前のおはしまして、^①「いざいざ、黒戸のみちをおれが知らぬに、教へよ」と仰せられて、引き立てさせ給ふ。参りて見るに、清涼殿、仁寿殿いにしへに変はらず。大盤所、昆明池の御障子、今見れば、見し人にあひたるここちす。弘徽殿に皇后宮おはしまししを、殿の御とのめどころになりたり。黒戸の小半部の前に植ゑおかせ給ひし前栽、心のままにゆくゆくと生ひて、御春の有輔が、

君が植ゑし一むらすき虫のねのしげき野辺ともなりにけるかな

といひけんも思ひいで (b)。

御溝水の流れになみたてるいろいろの花ども、いとめでたき中にも、萩の色こき咲きみだれて、^②朝の露玉をつらぬぎ、夕べの風なびくけしき、ことに見ゆ。これを見るにつけても、御覽ぜましかば、いかにめでさせ給はましと思ふに、

萩の戸におもがはりせぬ花みても昔をしのぶ袖ぞつゆけき

と思ひゐたるを、人にいはんも、同じ心なる人もなきに、あはせて、事のはじめに漏り聞こえん、よしなれば、承香殿を見やるにつけても、思ひいで (c) ば、里につくづくと思ひつづけ給はんとおしはかりて、これを奉りしかば、

思ひやれ心ぞまどふもろともに見し萩の戸の花をきくにも

思へば、さて同じさまにてしありかせ給ふだに、さおぼすなり。まして、つくづくとまぎる方なく思ひつづけんは、おしはかられてぞある。かくてあるしもぞ、今すこし思ひいで (d)。

かくて長月になりぬ。九日、御節句まゐらせなどして、十余日にもなりぬ。つれづれなるひるつかた、暗部屋の方を見やれ

ば、御経教へさせ給ふとて、「よみし経を、よくしたためとらせん」と仰せられて、御おこなひのついでに二間^{ふたまた}にて、たちておはしまして、したためさせ給ひて、局^③におりたりしに、御経したためて持て参りてわらはれんとぞおぼし召して、あまりなるまでかしづかせ給ひし御事は、思ひ出でらるるに、御前におはしまして、「われ抱きて障子の絵見せよ」と仰せらるれば、よろづさ^①むる心地すれど、朝餽^{あさかひ}の御障子の絵、御覽ぜさせありくに、夜御殿^{よるのむらじ}の壁に、あけくれ目なれて覚えんとおぼしたりし樂^{がく}を書きて、おしつけさせ給へりし笛の譜の、おされたるあとの、壁にあるを見つけたるぞあはれなる。

笛のねのおされし壁のあと見れば過ぎにし事は夢とおぼゆる

かなしくて袖を顔におしあつるを、あやしげに御覽ずれば、心得させまめらせじとて、さりげなくもてなしつつ、「あくびをせられて、かく目に涙のうきたる」と申せば、「みな知りてさぶらふ」と仰せらるるに、あはれにもかたじけなくもおぼえさせ給へば、「いかに知らせ給へるぞ」と申せば、「ほ文字のり文字のこと思ひ出でたるなめり」と仰せらるるは、堀河院の御事とよく心得させ給へると思ふも、うつくしうて、あはれもさめぬる心地してぞ笑まるる。かくて九月もはかなく過ぎぬ。

(『讃岐典侍日記』より)

〔注〕 ○黒戸——清涼殿の北廂^{ひさし}の北側にある部屋。持仏堂として使われた。

○清涼殿——天皇の日常の居所。大盤所、萩の戸、二間、朝餽間、夜御殿など多数の部屋からなっていた。

○仁寿殿——はじめ天皇の日常の居所。のちに内宴などの行事を行う場所となった。

○大盤所——清涼殿の西側にある部屋。女房たちの詰所。

○昆明池の御障子——清涼殿東側の弘廂^{ひろみ}に置いた衝立障子^{ついたて}。

○半部——格子の付いた板戸。内側または外側につり上げて開ける。

○弘徽殿——後宮の殿舎の一つ。清涼殿の北に位置する。皇后、中宮、女御などが住んだ。

○御春の有輔——生没年不詳。平安時代前期の歌人。

○御溝水——清涼殿の東庭を流れる溝の水。

○萩の戸——清涼殿の夜御殿の北側にある部屋。

○承香殿——後宮の殿舎の一つ。仁寿殿の北に位置する。女御などが住んだ。

○二間——清涼殿の夜御殿の東側にある部屋。夜間、僧が伺候して天皇を守護する修法を行った。

○朝餉——朝餉間。清涼殿の西廂の一画にある、天皇が食事をする部屋。

○夜御殿——清涼殿の天皇の寢所。

○ほ文字、り文字——笛の楽譜の音を表す文字。

問一 一次の作品群の中で、宮廷貴族の生活を主題としていないものを一つ選び、記号で答えなさい。

イ 『蜻蛉日記』

ロ 『紫式部日記』

ハ 『十六夜日記』

ニ 『弁内侍日記』

ホ 『和泉式部日記』

問二 空欄(a)～(d)には、助動詞「らる」が入る。適切な活用形に直して答えなさい。

問三 傍線部①～④を、動作の主語を明示して、現代語訳しなさい。

問四 傍線部①「よろづさむる心地」とはどのような状態か、五〇字以内で説明しなさい。

問五 傍線部②で、作者はなぜ「うつくしうて」と感じたのか、七〇字以内で説明しなさい。

三 次の文章を読んで、問一～四に答えなさい（本文の一部を改変したところがある。設問の都合で返り点や送り仮名、振り仮名を省略した部分がある）。（配点三〇点）

太宗威容嚴肅、百僚進見者、皆失其举措。太宗知其若此、
毎見人奏事、必仮借顔色、冀下聞諫諍、知中政教得失。貞觀、
初、嘗謂公卿曰、「人欲自照、必須明鏡。君欲知過、必藉忠臣。若君自恃賢聖、臣不匡正、欲不危敗、豈可得乎。故君失其國、臣亦不能独全其家。至如隋煬帝暴虐、臣下鉗口、卒令不聞其過、遂至滅亡。虞世基等、尋亦誅死。前事不遠。公等毎看事、有不利於人、必須極言規諫。」

（『貞觀政要』より）

〔注〕 ○太宗——唐朝第二代皇帝（李世民）。在位六二六～六四九。

○百僚——多くの官僚。

○举措——立ち居振る舞い。

○仮借——許すこと。見逃すこと。ここでは和らげること。

○諫諍——強く目上の人をいさめること。いさめ争うこと。

○貞観——太宗の年号。六二七く六四九。

○公卿——高位高官の大臣。

○隋煬帝——隋朝第二代皇帝(楊広)。在位六〇四く六一八。

○鉗口——口を閉じてものを言わないこと。

○虞世基——煬帝の寵臣。

○極言——思う存分に言う。言葉を尽くして言う。

問一 二重傍線部①「若此」、②「嘗」、③「豈可得乎」をすべて平仮名で書き下しなさい(現代仮名遣いでよい)。

問二 傍線部ア「臣亦不能独全其家」、イ「卒令不聞其過」、ウ「有不利於人、必須極言規諫」を本文に即して現代語訳しなさい。

問三 傍線部A「前事不遠」とある「前事」の内容について、本文に即して説明しなさい。

問四 波線部「毎見人奏事、必仮借顔色」とした太宗の意図を、本文全体をふまえ五〇字以内で説明しなさい。